慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鼓常良訳 文化の諸相と其進路
Sub Title	
Author	園, 乾治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.9 (1921. 9) ,p.1357(145)- 1358(146)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210901-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

贍なるを稱せざるを得ずと雖も、各人を以て窮に思ふに第一章第一節以下の七節は野村氏自らが科學の本質を體得する上に意義ありしものにして、讀者は寧ろ第二章「經濟學の科學的地位」のみを以て滿足する者に非ざるなきか。而して吾人は著者が本章における論述の比較的簡單なりしを遺憾とする者なり」（三田學會雜誌第十四卷第八號）と。評者は改版の讀過に際して再びこの遺憾を表現するの止むを得ざるものと感ずるものである。勿論著者は一切の論爭的議論を避けて端的に著者の考を述べるために、草稿における論爭的論議を捨てたと云はれてゐる。乍然評者の切に聞かんと欲する所は、著者の哲學的見地よりする、現代經濟學の批評である。さうしてこの場合において、現代の權威を批評の俎上に登せたりと思はる論爭的議論を聞くことが吾々經濟學の學徒に對して、殊に哲學的素養の全然缺如せる評者の如きものに對して、啓蒙するところ多きことを感ずるからである。この點の不滿を多少吾々に對して充足するものは、第二篇經濟價値の研究であらう。經濟價値論は從來經濟學の根本問題とせられてゐる。この問題に對する著者の見解は多大の興味を以て、讀み得た。勞働價値論を以て、冠履顚倒の議論なりとする論に對する反駁的議論、認識論の立場から理想主義的價値論の體系を樹立したことは、著者が經濟學說に對する貢獻であらう。

第四版經濟的文化の發展において、經濟的においては、生產が社會的其同的となり、精神的には人類の自覺てふことを文化發展の傾向を論じた著者は、第五篇經濟的文化の極致において、その理想において大約ギルド社會主義的思想を懷いてゐる。

要するに本書を一貫する思想は文化價値の研究である。「文化價値」「文化的生活」等の語は到る所發見せられる。評者の如き哲學の門外漢にあつては、その深い哲學的意義を遂に捕捉することが出來ず、本書の深遠なる意義を了解し得なかつたかも知れない。勿論これは、著者の罪ではなく、哲學的智識に乏ばしい評者の罪であらう。（加田哲二）

文化の諸相と其進路

菊版四七〇頁
定價三圓八拾錢
大村書店發行

著　常良譯

本書は Dr. F. Müller-Lyer の Phasen der Kultur und Richtungslinie des Fortschrittes の譯書である。著者は文化學の研究に對して自然科學の比較研究法を適用せんとするものであつて、著作の全體は次の如き部分に區分せられる。

第一部　經濟的發達の諸相
第二部　繁殖（愛、婚姻、家庭、親族等）の發達史
第三部　（同族から大國家に至る迄の）社會組織の發達
第四部　人間理解の歷史、即ち言語、智識、哲學的宗教的信仰の發達
第五部　道德、法律幷びに藝術の發達

即ちこの著作の全體は初めの五部で專門的の研究をなし、最後の部で一般的、且つ序論的の研究をなすべきものである。それ故に各部は相集つて全體を構成するのである。けれども、各部はそれぞれ獨立の著作であり、獨立に讀むも十分理解せられる（「第一版の序言」參照）。さうして茲に紹介する譯書は右の第一部の研究に係るものである。

本書は六篇に分たれる。先づ第一篇に於いては文化の意義、根源、區分を明かにし殊に人間の生成に就いて面白い記述が試みられてゐる。手、言語、道具、火の利用は必らずしも本書を俟つて初めて明かにせられることではないけれども、新進氣鋭の著者の面目躍如たるものがある。第二篇に於いては食料、道具、住居及び衣服の發達を論じてゐる。此處に於いても吾人は著者の發明になる「相的研究法」によつて、人間の文化生活を如實に見ることが出來る。先史的諸相の研究は必らずしも古生物學にのみ依賴

しなければならぬことはない、殆んど何等古生物學から材料を借用することなしに、民族學の方面からも工業的發達の諸相を解明し得ることを明かに敎へて居る。道具の發達にしろ、衣服の發達にしろ、住居の發達にしろ、我々は著者の豐富な蘊蓄を明快な記述によつて覩ふことが出來るが、就中、その先史的諸相と諸民族の生活の研究とは吾々を啓發することが頗る多い。第三篇は勞働の發達史である。第一章に於いては閉鎖的近群或ひは同族のそれより、十九世紀の末葉晩期資本主義的相に至るまでの勞働組織の變遷を述べ、第二章に於いてはこれ等の組織の組立を一同族組合、二家族的家政、三外部取引、四主君的大家政、（家内生産、賦役地、莊園）、五自由職業（資本主義的に組織せられぬ勞働）、六資本主義的企業、七社會化せる經營に分けて論じてゐる。次ぎに第三章に於いては性的分化、男子の分化、女子の分化に就いて自然民族との比較研究、近代文化との關係を明かにし、第四章第五章の兩章に亘つて在來の經濟學的段階說に批判を加へてゐる。さうして第四篇に於いては文化進歩の諸原因と題して、經濟發達の諸原因と進歩の一般的諸原因を明かにし、第五篇幷びに第六篇に於ける概括的記述と結論的叙說とを以て本書を終つてゐる。

本書の價値に就いては、ライプチヒ大學のバアルト敎授が言つてゐるやうに「智識階級に廣く理解さるゝ最良の社會學概論」と言へるであらう。それだから文化生活に就いての學的常識を養ふ爲にも、また吾人が文化の潮流に於て婦人運動が如何に重大な轉機であり、將來大凡如何なる方向に進むべきやも知り得ることは必須なる近代的自覺であると思ふ、といふ飜譯者の言葉が簡單であるけれども十分述べ盡してゐる。自分は今譯者の努力によつてこの譯書を些かの拮屈晦澁を感じないで讀み得ることを喜び江湖に紹介したいのである。

園　乾　治

雜報

慶應義塾大學經濟思潮講演會

慶應義塾は昨年の例に倣ひ、八月一日より同八日に亘り、構内大講堂に於て經濟思潮講演會を開催せり。講師及び其の演題左の如し

經濟思潮總論及び自由主義　氣賀勘重
科學的社會主義　小泉信三
講壇社會主義　阿部秀助
國家資本主義　堀江歸一
社會連帶主義　增井幸雄
ギルド社會主義　三邊金藏
社會的理想實現の計畫　高橋誠一郎